

音読を通してみる読解指導の留意点

——合成音声文との対比を中心に——

戸田 香 魚 子

機械というと、もうそれだけで拒否反応を起こす私が、思いもかけず『法則合成による任意語彙音声合成技術』などという、情報処理の最先端のような分野に多少なりともかかわりを持つことになったのは、かつて三省堂の明解アクセント辞典編修の折、秋永先生のもとで標準語アクセントに関しての知識をいくばくか身につけることができたおかげである。

合成音声については、先年筑波の科学万博の際、富士通でその音声が流されたとのことであるが、盛夏の一日、行列につぐ行列で、いったい何を見て何を耳にしたかもう定かではない。最近テープで聴いたその音声は音質もアクセントもいわゆるロボット調で、ごく簡単な文であるため意味はわかるが、自然な音声とは程遠いものであった。一年以上経たこの10月、NTTのコミュニケーションセンターの端末機から流れ出た音声は、アクセントに関していえば、複合による変化に対応しきれない部分とか、マス・デスのsがsuになってしまい点、またガ行鼻音化、無声化など、いくつかなの問題を残してはいるものの、漢字かな交じりの日本語が、かなり自然な連続音声に変換されていて、残された問題点の解決もさほど困難とは思えないことから、ここでもコンピュータが人間より正確に日本語文を読みあげる日が近いことを知らされた。

現在のところ、音声合成のためにコンピュータに入れられている語彙数が十分とはいえず、文章例による試行錯誤がくり返され、正確に読まれる

ための操作がいろいろ行われている。その段階でのテープをきき、正確さを期すための資料作成に携わっているわけだが、その操作と、外国人学生に音読による読解指導を行う際の操作との間にほとんど同様の注意を払っていることに気付いたので、改めてまとめてみたいと考えた。資料もいわゆる公開資料ではなく、コンピュータの操作については全くの無知であるから、あくまでも参考の域内の観察である。

——読解指導における音読——

読解とはもちろん読んで理解することで、実際には音声とは関係がないともいえよう。音読によって指導するのは、発音、イントネーション、漢字に対する正しい読みかたなどが主であることはいうまでもない。だが、学生が果たしてその文を理解しているかどうかを知るためには、音読はやはり不可欠である。

木村宗男先生の『日本語教授法』「読解指導の目標」によれば、どの学習者についても

- 1 読み終ると同時に完全に理解できること
- 2 個々の短文の理解のみでなく、長文全体の大意を把握できること
- 3 知らない語句は自分で辞書を引いて文を理解する能力を持つこと

を目標としなければならないとあるが、教師の先導もテープもなしに音読させることによって、前出の1・2ができるかどうか、3を予習で行っているかどうかチェックできる。たとえば

この工事に携わった / 宮大工の棟梁 / 西岡常一は / 偉大な / 木のいのちを / まのあたりに / 見た。 (/ はポーズ)

と読んだならば、語彙も意味も理解していると判断することができるが

...西岡常一は / 偉大な木の / いのちをまの / あたりに見た。

と読んだならば、〈偉大な〉の係りかたや、〈まのあたり〉という語がわ

かっていず、全体の意味の把握があやしいことがわかる。

音読の際の問題点としては

1 漢字の読みかた

(垂る木(たれるき) 脳裏(のうら) 千三百年を闊して(えっして)
不興(ふこう))

2 カタカナ

3 ひらがなの連続

(・木は...鉄筋よりも / はるかに生きながら / えることを / 教える
べき

・あっというまに現われ / では消えてゆく流行語)

4 漢字とかなのまぜ書き複合語の把握

(・木造部分を / うまくはずせるよう継ぎ / 手に工夫をこらし / ...
工夫をコーフと発音

・樗牛先生を / 教壇に立ち / 往生させたのも /)

以上の4点が考えられる。

1の漢字の読みかたの誤りに対しては、漢字が初出した時点から絶えず指導しなければならない問題なので、ここでは省略する。

武部良明先生が『日本語表記法の課題』「四. 漢字をめぐる問題」でその点を詳細に述べられている。結語の部分を引用すれば

個々の語を表すために用いられる漢字のほうは、それぞれの語ごとに固定しているのが実情である。問題は、その場合に個々の漢字の読み方すべて学習したとしても、そのことから特定の語の読み方が導き出せないということである。ただし、そのことは、漢字の場合に限らないのである。個々の語の習得に当たっては、その語の意味や発音を覚えるとともに、その語の文字表記を覚え、その文字表記の読み方を覚えるべきである——中略——未学習の語の漢字表記も自由に読みこ

なしたいと意図して、個々の漢字の読み方をすべて習得しようとする
ことは、全くむだなことである。漢字の指導に当たっては、まず、こ
のことを心得ておくべきである。 —332 ページ—

語の正しい発音の基礎となる正しい文字表記は口頭で教えるだけでは不
十分である。語研の中級教科書第 II 部にふりがなが多用されているのは
そのためであり、特に中国系及び韓国の学生は、発音と文字表記が一致し
ないことが多いので、上級段階でも漢字語の読み方の正しい文字表記をチ
ェックする必要がある。

2 のカタカナ語については、学生達が外来語とわかって、自らの発音
との差から、たとえ自国語であっても意味がとらえられないという苦情が
多いが、それ以前に、読み書き指導の際ひらがなに重点がおかれて、カタ
カナはそれほど厳正な読み書きを要求されないという点があるのではなか
ろうか。もちろんこれは何年も前の初級でのことであり、カタカナ語がこ
れほど多くなった現在は、その点を考慮した指導が行われていることと思
うが。

学生達の作文に苦しまぎれに現れてくるカタカナ表記で教師が首をかし
げることも多いので、発音と表記の問題をきちんと教える必要がある。そ
うでないと日本語化した外来語ならともかく、国語辞典にないカタカナ語
は外国人学生には調べられないことになる。日本語特有の三拍語、四拍
語への省略もまた外国人学生にとっては頭痛のたねである。脱サラ、革ジ
ャンなど漢字カタカナの交ぜ書き語は、漢字ひらがなの交ぜ書き語より、
さらに難解であるという。音読の際にカタカナが読めたからといって、理
解していることにはならないという前提のもとに確認することが必要であ
る。

2 のカタカナ語、省略語、交ぜ書きの問題も含めて、次の 3・4 の誤読を
みれば、読解を左右するものは一にも二にも語彙力であるといえよう。サ
ッカーが socker であり、マイコンがマイクロ・コンピューターのことで

あり、〈生きながらえる〉〈継ぎ手〉〈立ち往生〉ということばがあると知ってさえいれば、どんなことばが前後にあるかと文意をとらえることができる。文字表記と音声为一体となった語彙力をつけることが先ず第一である。

この点では人間もコンピュータも変わらない。音声変換が人間の読み方に近付くには、そのために膨大なデータベースが必要となる。10月19日付朝日新聞「天声人語」に、記事データベースの紹介があったが、そこにも次のように記されていた。

たとえばまた、拓殖大はタクシヨクダイと読む、とコンピュータに教える。これを怠ると、拓殖大空手部が、タクシヨク・オオゾラ・シュブとなって検索できなくなる。

まさに学生達と同じである。学生とコンピュータの違いは、学生は一度はタクシヨク・オオゾラ・シュブと読んでも、それでは意味が全く通じないから、拓殖大や空手部を知らなくても早大野球部のように〇〇大〇〇部ではないかと類推することができる。手の字をテと読んで、カラテブまで達することができる学生がいるかもしれない。

木村先生の『日本語教授法』には、

読解能力を形成する重要な柱の一つは語彙力である。語彙も何語あれば十分ということは言えない。どんなに数多く覚えても、知らないことばに出会うのが読解である。——中略——未知の情報が盛られた文章を読む場合には、必然的に未知の語が出てくるものである。だから未知の語に対処する方法を身につけさせることを語彙についての指導の目標としなければならない

——118 ページ——

とある。学生が類推するためには、造語の法則のようなものがそれまでにわかっていなければならず、また、漢字系の学生達にとっては、漢字も

重要な役割を果たしているのである。

コンピュータのほうは、学生のように類推することができない。エラーを示す灯が点滅するか、警告音を発するかで、その後は人間が新しい語彙を加えるのを待つだけである。しかし、コンピュータは一度語彙がインプットされればもう忘れないという強みを有している。データベースが完備すれば、留学生どころかおおかたの日本人より正確に日本語を読みあげるであろう。ただ、木村先生も述べていられる通り、データベースが完備するということはある得ないから、未知語に対処することができるのは人間だけである。

音読の際の問題点としてあげた3のひらがな表記の語、4の漢字とかなの交ぜ書きの語は、この語彙の問題と深く係っていると思うので、この2点についてコンピュータと対比させながら考えてみたいと思う。なお、どのような語がひらがなで表記されるかは、前出武部先生の『日本語表記法の課題』「三、書く立場からの表記」に詳しい。中級以上になったら、そのこともきちんと教えておくべきであろう。ただ系統的に教えてみたところで実際の文章の中で、どこからどこまでが一語で、文脈はどのようなのか、ひらがなの連続の中からつかみ出すことは難しい。中級段階では、そんなに長い連続とは思えなくても、

- ・首がかった / るくなるまで / ながめた。
- ・そう / こうしているうちに / 1時となり
- ・それで / もてれずに / 悪戦苦闘の末

というような読みが出てくる。誤読をさけるために〈使い方のコツさえ心得てしまえば〉〈木造は火事に弱いからダメだというのは〉〈文化財保護法をタテに〉のようにカタカナを用いる方法もかなりみられる。この場合、コツやダメはともかく、タテとなると国語辞典の 盾・縦・立て・殺陣・館のうちのどれかという問題が派生する。

〈「もとではツパだけ」といってほまさんは笑った〉という葛布の糸を作

る女性をとりあげた天声人語の文章も、「もとではつばだけ」では確かに理解しにくい。上記のように書いてあれば、ツバは唾とわかる。だが、〈モトデワ／ツバダケ〉と読んだ学生が、〈もとで＝元手＝資金〉と理解したかどうかは疑わしい。このようなひらがな部分に関しては、漢字系学生だけでなく、非漢字系の学生からも、漢字表記を求められることが多い。漢字系の学生は漢字によって理解できるかもしれないし、そうでなくても読み方がわかっているのだから辞書で調べる際容易だからだ。〈最近の日本語の特色は、カタカナことばのはんらんだといわれている〉という文で、〈はんらん〉が未知語であれば、確かに辞書を引くにはひらがなが便利だ。ただ辞書には〈反乱〉のほうが先に出て来て〈社会の秩序を乱すこと〉など書いてあれば、それを採用してしまい慌て者がいないとは限らない。〈氾濫〉としてふりがなをふるほうが語彙力を増す上では適正であると思うのだがどうであろうか。和語はひらがな表記が多く、あて字も多いことからやむを得ないにしても、漢語の表外字ひらがな表記はふりがなつきにしてみらいたい。

4の漢字とかなの交ぜ書きについては、なおその思いが強い。もともと中級教科書では意識的に避けられているとみえてあまり登場しないし、上級の生教材を使用する際には、当用・常用漢字にあまりとらわれずに書かれたものが多いから、問題となることが少ない。例外は、そしてこれが一番の問題なのだが、中級レベルあたりから、学生達が日本の新聞を読みたがる場合である。なぜならば、新聞はいわゆる常用漢字表に従って表記しているからで、今回問題点3と4に出てくる誤読は、新聞を読む時圧倒的に多い。

〈押なつ・危ぐ・残がい・けん制・ひん死・ほう助・覚せい剤・形がい化〉といった漢語や、

〈山あい・色つや・やみ夜・たき火〉

といった和語とも、この前後にひらがながついて文を成す場合、どこで

切るかを誤ると意味の上での理解にも誤りが生じる。まさに学生泣かせの語彙である。(ちなみに語彙と書かずに語いと書かなければならない)

そして学生泣かせのこの表記は同時にコンピュータ泣かせでもあり、私が興味を抱くに至ったテープとなって出て来たのである。

本来ならばテープの読みとった日本語文を学生に読ませて対比するところだが、作成された意図が違ひ、試行錯誤の段階での資料をそのまま発表するわけにはいかないで、テープに問題の出たひらがな語、漢字とかなの交ぜ書き語を、その問題点を生かした上で、自分の意図に合う短文を作成し、学生達に読ませてその問題の箇所での反応を見るにとどまった。音声変換の装置が使用できる段階に至ったところで、その意図を盛り込んだ長文を作成し、コンピュータと学生達との読み方を対比させたいと願っているが、今回はそのための予備操作とでも言うべきものである。

時間の制約もあり、学生は今年度になって担当した中級 C、上級 G2 のクラスから漢字系非漢字系各 1 名、計 4 名に協力してもらっただけなので、何かの結論が出せるということではない。便宜上学生を A B C D とし、A は上級漢字系、B は上級非漢字系、C は中級漢字系、D は中級非漢字系である。

はじめにひらがな表記漢語の文について。テープでは 19 例あり 14 例が正しい読み方であったが、文の長さからみて当然と思われた。学生に与えた 10 例の中から幾つか挙げてみる。

- 1 派閥間のあつれきも今回の選挙には影響がみられなかったようだ
- 2 高熱がつづく、なかにはけいれんを起こす場合もある。
- 3 高校生の間で人気があるしょうちゅうの生産量が昨年から伸びている。
- 4 集中豪雨ではんらんした利根川。
- 5 なんというふくいたる香りだろうか。

音声変換で誤りがあったのは 4 と 5 で、それぞれ シューチューゴーウ

「デワ / シランシタ」 <「ナント / ユーフク / イクタル / カオリダロー」とあった。4は<くで>と<くは>の連続を<くでは>と解説したわけである。さすがに学生達はこの誤りをおかすことはなかった。<ん>ではじまる語などないことを知っているからだ。5では<「ナントユー」が読みとれなかったことを示しているが、学生の側もCとDが<「ナントユーフクイクタル / カオリ」>と一気に読んで、意味はわかっていないことを示した。簡単な文であるため、全員が<くしょうちゅう>を読みとり、AとBは<くはらん>も理解した。漢字表記を示した結果、意味を解したのは<軋轢>と<痙攣>のAで、このほか<ぎょうこう・僥倖> <ひんしゆく・壺墜> <かいらい・傀儡>など、その部分を語としてとらえて発音はしても、意味はわからず、漢字表記もAに3例Cに1例理解を得させただけであった。このような語に関しては言い換えなどが用いられていづれ姿を消すのではなからうか。

つぎに交ぜ書きを用いた文で、これはテープでは242例のうち意味のとれるもの109例と50%を割っていた。学生達に読ませたのは問題のあった交ぜ書き語を用いての15例文にすぎないが、その幾つかを示す。交ぜ書きの下にカタカナで示してあるのは、コンピュータの誤った読みである。

- 1 生きるのに疲れたとけい動脈を切って自殺した。... / トケー / ドーミャクオキッテ /
- 2 疲労困ぱいのあげくこん倒した。... / ヒロー / コンパイノアゲ / クコンタオシタ
- 3 うたかたの恋とはつかの間の恋の比喩である。... / コイト / ハツカノアイダノ / コイノ / タグエデアル
- 4 丹沢山中の洞くつの中に避難した。... / ヤマナカノ / ホラクツノ / チューニ /
- 5 ネオンのつくところとりの市の人出は最高となる。... / ノツク / コロ

トリノ / シノ

学生側とはいえば、1について A, B, C はきちんと読んだが、B, C は頸動脈が未知語であった。ただ両者とも脈の字でたぶん手首を切っただろうと推論を述べたがもっともなことである。D はやはりコンピュータと同じくトケー / ドーミャグと読んで、〈時計〉と〈動脈〉だと答えた。漢字を示したところ、C はすぐ自分の誤りに気付いた。

2については、B がヒーロー / コンパイノ / アゲクコン / (ナンデスカコレワ) / タオ / シタと読んで「疲れた、困った、倒したことがわかります」とつけ加えた。A は前半は正しく理解し、こん倒もきちんと読んだが、意味は昏倒という漢字をみて理解し、D は読むことも首を横に振ってパス。

3 これは全員理解できず、A に至るまでツカノアイダと読んだし、比喩と書いてはじめて A, B, C が意味を理解した。A, C はヒュと発音したが、B はクラベユであった。

4 は全員タンザワ (これはふりがなをつけた) サンチュエーノ / ドークツ / ナカ / と読み、意味も理解した。

5 はまたわかりにくく、...ノ / ツクコロ / トリノイチノ / ヒトデワと読めたのは A で、B はネオンノツク / コロトリノシノ / と読み、C はネオンノ / ツクコロトリノ / シノ / とわからない時に多い棒読みとなった。つかの間にしろ、とりの市にしろ、漢字を書いても直接意味を理解する助けとはならなかったが、少くとも語の単位を示す役には立った。

以上、交ぜ書き語を無理に使ったこと、前後の文脈から類推できる長さにはないことから、これからまとまった結論を出すことはできないが、学生達と話し合った結果、漢字系・非漢字系、クラスのレベルに関係なく、漢字を書いて、ふりがなを振ってもらうのが一番いいという答であった。会話だけが目的の日本語学習ならいざしらず、中級・上級の学習者は、日本文の漢字表記を当然のことと受けとめているからであろう。ひらがな表

記による単なる音だけのことばより、漢字という意味に支えられたことばを好み、難かしければ難しいだけ、自分の日本語能力が高まると考えるようだ。

当用漢字による漢字制限で、日本語の語彙が貧しくなり、文体が冗長になり、読みにくくなり、字面が醜悪になったとする説は、丸谷才一氏をはじめ多くの人の説くところである。丸谷氏は『桜もさよならも日本語』の中で、新聞でよくみかける漢字と仮名をまぜて漢熟語を書く交ぜ書きや仮名書き熟語を滑稽な戯画ときめつけ、これらのことばは、「意味を伝達する力を言葉から大幅に奪ひながらしかもその言葉を使ふ、気安めないし申しわけめいた官僚的な事務処理と言はなければならない」と書いている。〈飯ごう炊さん〉ということばは中学校のキャンプなどでよく言われるが、〈飯盒炊爨〉とはとても書けない私が、丸谷氏を全面的に支持するつもりはないが、〈憂うつな春〉よりは〈憂鬱な春〉のほうが見た目にも憂鬱であるし、〈がれきからプラ爆弾の残がい〉よりは〈瓦礫から…残骸〉のほうがその情景を思い浮かべることが容易である。故平林たい子さんが、「書けなくても見れば意味がわかるから、ふりがなをつけて表外字、表外訓なども従来通り表記したほうがいい」と述べたとどこかで読んだが、私も全く同感である。それにこの頃のようにワープロが普及して、漢字からひらがなへの変換、ひらがなから漢字への変換も自由自在となり、一方では小学校からパソコンによる授業が行われているということであれば漢字制限などあまりこだわらなくてもいいのではないだろうか。

垣間みただけでも、仮名書き熟語や交ぜ書き熟語は機械にとっても人間にとってもかえって読解の妨げになるようである。特にどんなに難しくても一度インプットしてしまえばそれで OK のコンピュータは、漢字をインプットしたほうが良いにきまっている。最近の新聞の第一面から問題の表記を拾ってみた。和語の〈歯どめ〉はともかくとして、交ぜ書きは〈あ然〉と〈タカ派〉、これまで交ぜ書きであったと思われる〈背馳(はいし)〉〈平坦(へいたん)〉〈凋落(ちょうらく)〉は、〈 〉内のようにふりがなつき

であった。データベースにたくわえるのに、このほうが便利なのであるか。

最後に先程引用した武部先生の「漢字の読み方について」の結語をもう一度引用させていただく。

一般に言語を理解する場合、文字表記から発音が分かるのと文字表記から意味が分かるのとどちらが役立つかといえ、意味の分かるほうが役立つはずである。その点では、漢字が意味を表す文字だということを、もっと積極的に活用すべきである。そうして、このことが、漢字で書かれた語の意味を記憶の中に定着させる上でも、大いに役立つことを十分に心得ておくべきである。

—333 ページ—

時代の趨勢は中国・韓国などアジアに於ける隣国との友好を強めつつある。そのような時に、意味を理解する上での共通語である漢字をひらがな表記にしておくことは好ましいとはいえないのではなかろうか。

参考文献

- 日本語教授法 木村宗男
- 日本語表記法の課題 武部良明
- 日本語の世界 4 日本の漢字 中田祝夫
- 日本語の世界 10 国語改革を批判する 丸谷才一
- 桜もさよならも日本語 丸谷才一
- 〈論文〉・係り受け解析を用いた複合語の自動分割法
 - ・日本文音声変換のための数詞読み規則
 - ・単語間の意味的結合関係を用いた複合語アクセント句の自動抽出法
- 以上 宮崎正弘